



扶桑皇統記圖會

編

一

45
~ 13
2109
16



へ 18
109
16

浪華好華堂主人著編
同柳齋重春先生画圖



扶桑皇統記圖會

後編 全七冊
下集

浪華書肆

岡田羣玉堂
出田群鳳堂



應天門の方(ゆう)行(ゆう)とるふど。緒(よ)弟子(し)達(た)不(ふ)審(しん)梯(は)子(こ)あとうけて点(てん)を加(か)へりふや
と後(あと)小(こ)徒(た)ひ行(ゆ)けてるふ。小(こ)空(くう)海(かい)和(わ)尚(じやう)從(じゆ)容(よう)とて門(かど)の辺(へ)空(くう)寄(き)のひ筆(ふで)と執(と)り墨(すみ)を
を合(あ)せ。高(たか)く門(かど)上の額(がく)を臨(のぞ)んが筆(ふで)と櫛(かみ)ちのひくも小(こ)毫(かう)厘(り)も狂(くる)むを魚(う)の字(じ)
の上(う)小(こ)直(ち)点(てん)を墨(すみ)黒(くろ)ふ少(すこ)筆(ふで)其(その)終(しゆう)下(か)落(お)つて筆(ふで)勢(せい)を加(か)り多(おほ)く是(これ)を見(み)物(もの)せ
一(ひと)弟子(し)達(た)其(その)余(あ)の緒(よ)人(ひと)あつと斗(たう)小(こ)感(かん)嘆(たん)も突(つ)も不(ふ)思(し)議(ぎ)の名(な)僧(そう)とあつと賞(しょう)
る。此(この)義(ぎ)層(じやう)聞(もん)小(こ)達(た)今(いま)小(こ)始(はじめ)ぬ空(くう)海(かい)が神(かみ)筆(ふで)うふと深(ふか)く層(じやう)感(かん)在(あ)り即(すなは)ち官(くわん)
中(ちゆう)の口(くち)は御(ご)賞(しょう)美(み)の上(う)多(おほ)くの被(おほ)物(もの)と給(たま)り。後(あと)代(だい)まで私(わが)法(ぽう)の投(な)筆(ふで)と持(も)つ
此(この)更(さら)なり。和(わ)漢(かん)兩(りゆう)朝(てう)小(こ)能(のう)書(しよ)とて。空(くう)海(かい)和(わ)尚(じやう)のてく五(ご)筆(ふで)と揮(う)ひて一時(いち)時
五行(ごぎやう)の書(しよ)とて。或(ある)水(すい)面(めん)小(こ)詩(し)を書(か)す。今(いま)も筆(ふで)と投(な)て点(てん)を加(か)る小(こ)の奇(き)更(さら)も
前(まへ)代(だい)未(み)聞(もん)と縉(しん)を。後(あと)代(だい)小(こ)りて紀(き)百(ひやく)技(ぎ)とて人(ひと)空(くう)海(かい)和(わ)尚(じやう)の書(しよ)のひ。皇(きやう)皇(きやう)
門(かど)の額(がく)を。其(その)筆(ふで)は力(りき)の蹟(あと)尾(び)小(こ)似(に)うと排(はい)録(ろく)とて。其(その)夜(よ)の夢(ゆめ)小(こ)二(に)三(さん)語(ご)

羅刹来り権者の筆跡を引く罪人を罰せよとて百枝を鉄の索に強
縛り管を揚て散く小筆多ふぞ百枝苦痛小堪るの罪を懺悔し色し
と泣謝れむ鬼どもよとて管を止め索を解救して何國ともなく去
忽ち夢に覺るる其より後五射痺て生涯癡人と成るとぞ又小野道
空海和尚の書のひし朱雀門の額ありび小大極殿の額の文字とて朱雀
門の腕瘳痺とこれより筆を執て書とて小自在を成るる絶世の能
書なるを慄ひあが書れり千跡以前より却て筆勢奇絶ふんえり世
の人道風の慄筆と賞美せとて彼世尊寺藤原行成卿空海和尚の千
跡を深く尊敬して其書風を學び遂小日本三跡の一人と異國まで
譽と傳へたる菅原道真公も空海和尚の筆法を慕ひ學びて

書の管とせ小高うまひたり是は且ちたて空海和尚ハ高雄寺の幽静なるを愛
しひ内裡小法務あるの余日ハ高雄寺小の住一のひもがえ来高雄寺和氣
朝臣清平居士佐八幡宮の神勅を蒙りて建立する所の道場にて神願寺と
号せり或後小神護寺と改められける然小空海和尚歸朝在後和氣清平
の息男真綱大夫空海和尚を深く信仰し高雄寺の住侶とせむ思其
由を朝廷願ひしれ即ち勅許ありて偕そと高雄神護寺と空海和尚小給り
一かり然小寺門の額いよの額を改めしれを真綱新小額を造高雄寺
附せん朝廷其旨と奏達し額面の書空海和尚の捺筆と願人と新額
者小齋一高雄寺赴れ多小折しも大雨の後小清滝川の水漲り溢る
流し落渡るがれ便なく如何せん猶豫多小空海和尚ハ高雄寺小在
真綱が額面の書と望む意と知覺し弟僧小筆硯を持せて

下り真綱まづな向むかい高たか声こゑ小こ貴き卿けい當とう寺じ新しん額がくを寄よ附つせんと是こゝに持もて奉ほうせし
一い段だん始はじめ入いり谷や小こ洞どう河がの橋はし落おちれを渡わたりも久ひさ更またの煩わづらりも重おもし。空くう海かい是こゝ所ところより
額がく面めん小こ拙ちつ筆ひつと揮ひひいんあつ。其その額がくを高たかくきり上かみて持もて奉ほうせし。仰おほせ。真ま綱づな公こう定じやう
海かい師しの額がくの文ぶん字じと望のぞむ意いと早はやく察さつ知ちせし。此こゝ處ところと彼か所ところと。洞どう
一いつ成なり隔へかる。彼か所ところより額がくの文ぶん字じと書かきん。如何いかなる方便ほうべん小こやと不ふ審しんか。權けん者しやの約やく
をれをとも。從したが者しや小こ命めいト額がくを高たかく指さ上かみさせて待まち居ゐる。空くう海かい和尚わうハ谷や川がわを隔へか其その間ま
違ちがひ坂さかの巖いわ頭づか小こまの。後ご弟てい持も持もせし。筆ひつと批ひて墨すみト公こう定じやう。額がく面めん小こ向むかひて毫こゝろを
揮ひひも小こ不ふ思し議ぎや其その墨すみ雲うん霧きの。く空くう中ちゆうと飛と到たう。額がくの面めん小こ神しん護ご國こく祚そ真ま言げん
ト。墨すみ黒くろ小こ著しやく且かつ筆ひつ勢せい類るいた。書かのひも小こ。真ま綱づなを先まに合あ筆ひつ意いと斗と
感かん嘆たん。声こゑ洞どうの水みづ音おん小こ雜ざつりて少すこ時じハ鳴なも止とまり。真ま綱づな眼がん前ぜんの奇き特とくと見み
て屢しばしば讚さん美み。か多おほ不ふ思し議ぎの御ご墨すみ跡せき天てん覽らん小こ備びて後ご寄よ附つい。か。拜らい辭じ

て都みやこへ歸かへり參まゐり内うちにて在あり。次つぎ弟ていと奏そうし額がくを睿み覽らん小こ備びれを帝てい御ご敬けい馬ば。真ま綱づな
先ま達たつての投な筆ひつと今いま度た。谷や川がわを隔へかて書かと渾こん更せい小こ凡ぼん夫ぶの及およぶ所ところ
小こあつ。実まこと佛ぶつ菩ぼ薩ざつの再また誕たんとあはむ。と弥や脚けつ信しん仰やうと増まひひく。斯かて
真ま綱づな六む件けんの額がくと再またび高たか雄ゆう寺じ持も持もせし。寄よ附つり。今いま猶なほ右みぎの額がく高たか雄ゆう寺じの空くう
去き程ほど小こ空くう海かい和尚わうハ高たか雄ゆう寺じ小こ於おて。諸しよ弟てい子しと教きやう導だうれ。程ほど小こ各かく捐けん金きん胎たい兩りやう
部ぶの深ふか理り小こ達たつせし。今いまハ天下てんか小こ真ま言げん宗そうと弘こう通つうせん。弘こう仁に元げん年ねん三さん十じゆの春はる參まゐ
内うちありて真ま言げん宗そう流りゆう通つうの義ぎを願ねがひ。即すなはち身み成じやう佛ぶつの理りを奏そう聞もんし。ひも小こ帝てい其その法ぽう
を尊たうとんむ。猶なほも諸しよ宗そうの高たか僧そうを召め集じふめ。ひ空くう海かいを願ねがひ。願ねがひと。真ま綱づな公こう定じやう
乘まの宗そう派はいの義ぎ可か否ひ如何いかなる。執しやく回かいせし。是こゝ小こ依よて諸しよ宗そうの碩しやく德とく達たつ。涼りやう殿でん小こ居ゐ流りゆうて空くう海かい和尚わう一人ひとりを對たい人にん小こ。抑おさ欽きん明めい天てん皇わうの御ご宇う小こ佛ぶつ教きやう幼ようて我われ朝あさ
小こ渡わたり。聖せい德とく太たい子し隆りゆう人にん小こ佛ぶつ法ぽうを弘こう通つうし。ひ。未み代だいの賢けん哲てつ入に唐たう渡わた天てん

空海和尚

各佛法の真理を学究め七宗の行果と本朝小傳とを以て其の未だ即身成佛の法を究むべきと銘し学究を以て辨舌浪と起論難とを研し法論なる小空海和尚少くも辱むるに其難向を言解ゆす更詞義明小弁舌懸河の言半句も滞りあるを満座の衆僧理小塵とて口を憇と玉を塵の内小眷属在と帝と首より並居る月卿雲客とて空海和尚の博識各弁と感嘆し満殿を寂寥と静まりける。時小空海和尚八南方向ひて契印と結真言と誦と秘觀を凝し肉身忽ち毘盧遮那佛の尊容と變じて八葉の白蓮の上小坐し白毫より赫たる光明を放し殿中さかづる。瓊璈の妙界の光輝たる香復郁と薰じりける。又數々の僧綱大小孩れ各陛下走り下り首と低身と平伏て敬礼し帝と先とせり並居る猪御も思ふと合掌禮拜ありける。少時ありて空海和尚結し印を

空海和尚

と解て本相小還り再び生佛無二の真理を説ひこれに衆僧も感伏して即身頓悟の疑を解君も脚感斜あも遂に真言宗流勅免の倫首と給うる。空海和尚大いけい禮んで頂戴し是より君の脚信仰以前十信女御宮妃緒宮方公卿大夫とて真言宗を尊び袈裟衣佛具其餘財帛を寄附する人日夜絶間なく一宗の教奉昌天下の耳目と發りける。
東大寺蜂怪南園堂建立 高野山開發伽藍造三更
南都東大寺八聖武天皇の御建を以て重勅勅願所なれは、高徳の僧と擇りて別當とせられ寺中の学寮小勸学をも僧多々天下小双あり教奉昌の法を傳へりける。弘仁二年の比大いけい五寸許なる山蜂幾百ともあはれ出たりて寺中の僧俗を蝨々たる小を蝨々たり者、急ち大糸服て、諸人肝がく惣身大熱出煩悶。終小死小乃者數十人ありて諸人肝

を消種く追拂へども却て其徒小逆ひて螿多程小とてあてて逃
退れ家小引籠り昼八出る更なり夜のそ出づ諸用を弁下る小後小
の家く小乱まて螿多程の今小蜂を防ぐ能れ術なく僧俗とも寺中
逃去く他所移住邂逅寺法を守り僧八命を抛て残り苗するとい
どもそれ蜂の害を防たの字業漸く疲まき法脈も小絶なん
とく多小と皆此寺衰滅をた大鹿縁かりと軟たあり。帝其由と
引て宸襟安くも空海和尚を召まき。你東大寺小移り住て惡臣の
災害を退けいとも即ち東大寺の別當小任下りひたり是小依て空海和
尚東大寺小のりて住ひしれ。不思議なるふさも夥しく群り出
大蜂一疋も出る更なり蜂の禍ひ忽ち止る小と諸人奇異の思ひを
し是ひく小空海和尚の法威小するところなりと感へ退散せし僧俗

中寺中へ還り任たり空海和尚東大寺小任職の間小種々の法要を定
め置のひたり。今の西室南院亦其旧跡なり。茲小大職冠録足公の南孫小
左近衛大将正四位藤原冬嗣公と申す空海和尚の道徳を崇び師檀の
契り浅うさる。興福寺の空海公の建立小て藤原の氏寺と定めれ
られ猶も家門繁栄の爲め空海和尚と相議り弘仁四年興福寺
の寺中小地を見ま八角の圓堂を營て建空海和尚直作の三日月不
空羅索の觀音の像と安置し修行持念せられ。今の南圓堂是之
右の南圓堂修造のうち入夫の中へ入の老翁有るが首の歌と詠を
補陀洛のそめみの岸小堂たて今を築へん北の藤波
とよの其後行方たて成る。空海和尚冬嗣公小結りて伴の公初春
日大明神より小姿と現し藤原の繁昌とて我を告のひりわると

仰せらるる小冬嗣公大い喜悅ありて春日明神へ幣と捧げ神恩を謝し
あひまらるる果して子孫敏宗昌一家に富栄多きを芽出度り多き
小空海和尚祈願の如く真言宗天下に流通し多きを望み足ぬと歎き
更限りわく其成就も帰朝の砌り船中より難風小遭如藍を建させ
と誓ひ三股杵を抛ちし更を昼夜忘るるをいそぐも其法の敏宗敷小
暇なく空しく數年と過しつるも今已小宗派成就し多きいづや彼空
器の留まる地を尋んて畿内近國を經歷しつるも小大和國宇智郡小於
て一人の獵夫不往逢ひ其入表せんと小骨相異形小尋常あり身
材高く筋骨逞しく面色黒く兩眼尖く光り身小藤織の衣と著し脚
小革袴を穿れて太刀と帶弓矢を手挟み黒白二足の獵狗を牽き空海
師御覽して獵夫不討ひ其許小且夕深山幽谷と地廻り山々峯々の空内

よく知つる我小空海として靈場を求め如藍を造るる大願ありて近
國小然るに靈山ありて教られし仰せし獵夫笑て曰仰つる我紀伊
國の獵入めて此年来近國遠國の高山深山を登らざる所もなく其最上
の名山の所紀伊國伊都郡の南に當て三面山列り巒を隔けて一流の溪水東
小流し峰從耳溪深きなり羊腸さの險阻なり法虫人を驚かす猛獸人を
害むる絶頂ありてを廣くたる平地ありて白日此山の雪雲變遷夜陰に靈光曲
方小耀り如藍を建せし多きは城小究竟の名山なり和尚り彼山を隔たぬ
如藍を造るるを恐るる六日本第一の佛場とかりんを我もまた三年殺生せ
滅罪のより一臂の力を助けまさんともあれ和尚り彼地の案内をわたりて
此二足の犬を貸すなりすは此山路の導引をまかりんを率連るる獵
狗を貸すなり小空海師深く懐ひ厚く礼射を述て犬を借りしを獵夫ハ

三ノ山ノ目録



山崎闇斎先生遺稿



清滝川と隔て
空海類の
文と書

柳川三伝画

山崎闇斎先生遺稿

九七

再會と約して別去り。空海師はそれより二足の狗を先かゝりて大の生方へ歩往す。小西狗ハ野を過里を越山を分溪と廻り遂に一座の高山に登り平原の地を止り。空海師大の挙動を感ずり。實中獵男の言。如く畜生あり。山路を列々する高山の路をよく知るを殊勝かたて。二足の犬を賞し。借山中の罝を眺望し。實中獵夫がせしむる葱嶺銀漢をさへみて。白空瑠璃浴つ。々々東西龍の卧るが如く南北虎の踞るふ似て。浮查に乗ざれども忽ち小天洞入仙薬を嘗ざれども暗し神窟を入る心地。峰の松風ハ煩惱の聲をさす。林の鳥声を元明の睡を覚し。真修修禪相應の靈地佛法弘通の聖跡此地ハ勝る所や有べしとて。只管嘆美し。ひひ。わんわんの靈殿。目標のより一室の秘符を印書此上六都へ上り。當山開基の義を願ふとて下山す。二足の犬を何地行らん影がも見えども。是より不思議の更なる心申す。山を下りて都へ還り

上の弘仁七年六月十七日表と奉りて。紀伊國伊都郡の南の山を入定の地。下へ給ふ。人妻を願ひ。つる小天聽滞り。七月八日勅許の宣旨と下り。りりり。是の依て空海和尚徒弟泰範。實惠。亦て從へ。彼山へ赴。死。官符と。人夫を慕り。山茂。開。をら。つ。小。前。の。獵。夫。も。来。り。て。人。夫。と。も。小。草。と。朽。樹。を。伐。土。を。あ。り。て。運。び。て。夫。力。と。助。け。た。れ。空。海。和。尚。其。旁。と。謝。し。且。靈。地。を。指。示。し。り。謝。を。述。り。小。獵。師。も。當。山。開。發。の。義。を。悦。び。黃。昏。お。か。ひ。て。別。を。告。去。々。々。其。夜。空。海。和。尚。の。夢。亦。件。の。獵。夫。有。り。姿。亦。列。々。衣。冠。正。しく。威。儀。制。ひ。て。出。現。あり。空。海。和。尚。向。ひ。善。哉。と。師。信。力。堅。固。佛。法。弘。通。ある。が。也。我。伎。小。獵。夫。の。姿。と。な。り。て。此。靈。山。を。教。示。す。り。真。六。此。山。の。禁。天。野。小。鎮。座。ある。丹。生。津。比。咩。命。の。子。高。野。明。神。たり。と。告。り。ひ。光。を。放。て。去。り。て。又。て。夢。覺。た。れ。空。海。師。感。涙。衣。の。襟。を。洗。ひ。め。い。され。ば。こと。彼。獵。夫。ハ。九。人。を。思。ひ。り。果。して。此。山。の。守。護。神。あり。在。り。と。地。

其跡と礼拜し神恩を謝し是より山を高野山と号け南山一社をまき高野大明神と鎮祭り又村原の天野小丹生津姫命と鎮祭りの俱小高野山の鎮守の神と宗のひたり松をふ又不思議なる山中と切排せられたる樹木の中小株の松ありて先年帰朝の節松ありて龍猛菩薩傳來の三鉢儀を懸て懸りたり空海和尚是と人のいへて愕然と感涙をむせり此靈器疾より此山小苗り伽藍を建かた地をとりて彼高野明神獵夫を化して我れ此山と指教のいへ時昼と紫雲たがひた夜に靈光耀々と告のいへ此靈器のあり奇特ありといふ秘教相應の靈地なる更是とみてまをりて歡喜踊躍の堪むと三股杵と取て三度押頂にのひたり即ち今猶高野山の室藏小納り松に三鉢の松と号して今の世でも無常成り斯て草菴成就しを空海和尚の治むは是より都の法勢の暇ある時高野山の菴室に任て行ひ燈りのひたり

其後弘仁十年嵯峨天皇御悩み深のひれを醫官の面々肺肝をなれ良方と考て御薬と勧め奉りたれども更其験なくたれを空海和尚を召して加持させしむる所御悩平痊在りたり是より依て睿感斜多に其御恩賞して高野山の伽藍を速小建立し得るを得と勅詔を下しひたり緒卿倫命と奉りり番匠治工數百人の入夫をさ遣り奉行頭人諸職人を別し昼夜を捨す堂舎の經營と急がらるるゆへに匠業をいげ堂塔樓閣房舎のつる近玉と磨たて造営し空海和尚の指揮に従ひ南天竺の鐵塔小擬して高さ十六丈のま室の浮屠と建たるを二層の甍に霞中小輝れ九重の輪に雲外小鮮なり塔の中六丈尺の大日如来の佛像と安置し其余八尺五寸の菩薩の像四軀を居置猶す山の真深く入り一院を建入定の室と定めり今の真の院の御影堂是也凡高野山開發弘仁七年七月より山を開れり十年の其佛閣僧房鐘樓鼓

三十一

樓大塔山門のりだいとうさんもんのりまを畫かく成就じゆうじゆしるは五月三日ごがつさんじつ落慶らくけいの法ほふを執行しやうぎんされ
高野山たかのやま金剛こんがう安平あんぺい寺じと号ごう日本にっぽん第一だいいちの名刹なめいさつと成なり戒かい一度いちど糸いと結むすむる輩あひ八十はち思し五ご
逆さかの罪つみを滅めつし三さん惡道あくどうの苦患くげんを免まぬる成佛じやうぶつ得脱とくだつするを支し疑ぎひかりと云いふ

因よ小こ高野山たかのやまの伽藍がらん修造しゆざうのせの地ちを掘平くわへいぐらと一いつツつの石せき龜かめを掘出くわいしゆし内うちと
檢あり見みられ小長せうぢやう五尺ごせふ幅はらみ一いつ十八じふはち歩ふの宝劍ほうけんを藏かくしる空海くうかい和尚おんしやう是これを得えて深あく
感かん歎たんしる此山このやま素すり古仙こせんの遊あそび所ところなる支し此この宝劍ほうけんを以もつて知しることとて劍けんを
秘藏ひさうしる後年ごねん勅命てふめい依よて天てん賢けん小備せうびられ其その後のち朝廷てうてい小置せうぢせらることひびく
然しかし頻しきり怪異けがいの支し去き續つ々つれる博士はくし小占せうせんせらることひびく高野山たかのやまの劍けんの宗そうたることす
奏そう聞もん中ちゆう々つ々つのこ銅どうの筒つつ小納せうなり回まわること高野山たかのやま返かへしるひひと云いふ

東寺賜空海西寺賜守敏

空海守敏法方優劣條

弘仁十四年正月大納言正三位兼右近衛良房かみをかく空海和尚くうかいおんしやう小洛せうらくの東寺とうじと給たまは

りりりり時とき小南都せうなんとの守敏僧都しゆみんそうどう小洛せうらくの西寺さいじと給たまはり柳東寺りゆうとうじ西寺さいじ八吉はふきちの
臚ろ館くわん小せう唐土たうとより来朝らいてうする使者しやを侍卿しやくせい食じする旅館りよくわんたり々つと桓武天
皇こうの御宇ぎよ小寺せうとかりひひて東寺とうじ西寺さいじと号ごうられる是これ平城へいぢやうの東大寺とうだいじ西大
寺さいだいじ小准せうぜられるかりり空海和尚くうかいおんしやうと拜領はいりやうありて則すなはち寺てら中ちゆう灌頂くわんてい院いんを建
る唐土たうとの音龍おんりゆう寺じの法式ほふし小效せうひ毎歲まいさい二序にじゆ灌頂くわんていの法ほふを執行しやうぎんしる惠果
禪師ぜんじより付嘱ふぢゆくせられる健陀國けんたこくの教子けうしの袈裟けさ袈け日に念珠ねんじゆ唐帝たうていより拜受はいじゆの
珠數じゆず唐土たうとより精末しやうまの二百餘部にひやくじゆの金剛乘こんがうじやうの法ほふ文ぶん三圓さんげん相承しやうじやうの佛舍利ぶつせり佛像ぶつざう
ホとと畫かく大經藏だいけいざう小納せうなり永とこく當寺たうじの付室ふぢむとぞせられる凡おほ直言ぢやくげん三部さんぶの經
の中小東寺せうちゆうとうじへ金剛頂經こんがうていけい金剛頂經こんがうていけいの道場だうぢやうとなりて專せんらる金剛界こんがうがいの法ほふを修しゆす
秘密曼荼羅ひみつまんぢらもとび空海和尚くうかいおんしやう自作じやくの佛像ぶつざう二十にじふ軀くをあ安置あんぢしるふらることひびく
秘密傳法ひみつでんほふ弥勒みらく勤山きんざん普賢ふげん惣持そうぢ院いん金光明こんくわうめい四天王しつてんわう教主けうしゆ主護國寺しゆごこくじと号ごうせられる

是より空海和尚くわうくわいの時とき、高野たかのの山やま行ゆきひ一時ひととき、東寺とうじ小在せうざい、
を導まねすれ衆生しゆじやうを化益けやくのいひたり、是こゝ且まづわいて空海和尚くわうくわいと、
守敏僧都しゆみんそうづも法力勝ちかと、知藏ちさうなりたるを、嵯峨さか天皇てんかう常じやう小宮中みやちゆう召まま、
せまて御聴聞遊ごていぶんゆうされ空海和尚くわうくわい小方せうほうど御ご依より在あるが、
とて湯ゆと石いしをせむひ、小珠せうしゆの外の沸湯わいてうも余あまり熱あつくを、
折をりし守敏僧都しゆみんそうづ入いりて御前ごぜん小居せうい合あはれ、
まなる小せうの熱湯あつたう急いそぎ冷水れいすいとたりる、
御不審ごふしんありる時とき、守敏しゆみん完示くわんしとこゝひ、
僧水そうすい印いんをひき冷ひやしむらひたりと、
御賞美ごせうび在あり、其その後のちも一時ひととき、
其その月つき殊ことごと更寒さら氣き嚴げん、

のひて守敏しゆみんと御物語ごぶつごなり、
みえられむ火氣かき熾さかんむ、
守敏しゆみん向むかひて、
易やすれ御ご更さらひて、
とて曰いはの寒さむ冷ひやと、
敷ふくの被物かひものを給たまひ、
簾れん間ま近ちかく、
が両度りやうど法ほう力りきと、
者もの左ひだり程ほどの義ぎ、
中ちゆう侍しやくひ、

三十一日

空海が殿中小在りて守敏の法力の行れざる更や有らば此六兩僧が法力の勝劣を試し見んと思召空海小向ひのむむ和僧ハ彼所の忌廉内小隠てらるひい守敏を百寄て注力と施きやれと詔ありて即尅官人小命し守敏僧都をどられざる是小依て空海和尚ハ側の御簾の内小身を隠して守敏の参内わひ氏待りし時斗ありて守敏僧都参内せられぬ帝ハ祥と是を知りぬ御風情も浄手の湯を持ちて宣ふ兼て内勅を奉り内侍典角盟小湯玉のまごりの熱湯を汲湛て捧げ出君の御前さう上られぬ帝御覽し是ハ殊の外湯の熱れと宣ひさう守敏を御覽し和僧ハ何時のわひ小来りしや幸乃折りたり此湯と冷し得ませよと勅し和僧都唯と領掌し袖の中水印と結これをも更小湯ハ冷きりり守敏是ハ如何とて再び咒語を唱へ印と結あをせども尚少し冷まれぬ帝局を召て水と入せりて御手と浄めぬ又昨日ごとく火鉢

小紅炭と堆々積ると敷ヨ寄りの玉座の両辺小置せし守敏と御物記在りち火氣宮中小充て帝御額小汗を流しりよおと守敏先中徴を又袖中水印と結りし火氣消せと信熾小わたりりよおと守敏ハ二度の不覚小心中にさしと是ハ何なるやゆやと我おろ不審暗申を忙せとて惆果する時ハ側ハ筆簾の内より空海和尚從容とて立出りし守敏小向ひて如何や僧都各月の所小星辰光を詠りばと仰れし守敏大い赤面一言も答るま能くも手もち悪小出せし退出せし心中小空海和尚を深く恨み西寺へ歸て心快くして樂すと何卒空海小耻辱とて此恨を晴さんものと暗怒の始とすれは是を兩僧遺恨の始とハまされり

嵯峨天皇御讓位

守敏空海

弘仁十四年の嵯峨天皇右大臣藤原冬嗣を召し詔し

て朝政を聴ふ頼り依て帝位を太子小讓人と思ひ卿より譲位の義を執
てくひの言ひを冬嗣公讓んで奉つり古より聖人を聖人を知とせり
今陛下仁徳唐堯の優らせゆの皇太子大伴親王より唐堯の聖徳ありさ
く劣むされ万機の政勢を付託させゆの更滅天が下の慶幸何更く自愛小退の
を允然とも近年諸國凶作續れ万民飢餓の患小苦むの時節即ち上皇
在と上君より太上天皇とあせむる恐らく士民の貢物嵩て民の敷たふ成
いぬに備て願ぐ今昔く年の豊熟さる代待せゆて後御讓位かゆ万
民の大幸さるるを素りいさ御兼老と御齡おて自らせよゆの御讓位
の御更さるる晩とやゆてもいさと啓奏ありさると帝より口御練中理有と
りとも太子の賢明朕おする勝れを帝位を傳ふ方民の為とかりあり近年五
穀不熟なる朕が徳の薄たゆを太子位小即を年豊能小敏とて朕が心

己を決せりて敢て練を用ひまされ冬嗣公も此上力かると群臣小君の勅詔を
つて遂小皇太子大伴親王を十善の宝位小即より人皇五十三代の聖主と仰死
奉らる此君を淳和天皇と称なれり即ち桓武天皇弟三の白王子小即御母白皇太
后旅子と藤原百川の女小即在り御即位の大札を執行平城帝と前の
太上天皇と嵯峨帝と後の太上天皇と尊号なるの年号と改め天長元
年と改えありさる嵯峨天皇の皇子正良親王と春宮小立り其年乃九月
小後の太上天皇嵯峨の離宮遷りかると中納言藤原三守と公て其義と淳
和天皇へ奏聞させゆの事新帝勅許在り右司小勅詔を下りて宝車夜
供奉の公卿前隨後従の武士を定め行幸の儀式厳重小整へんと仰出
るると上皇固く御辞退かりの事上再三勸結りとも承引むる事遂小
前駈兵杖の儀式を差止られ御馬小召れ供奉の官士少々召連りて密小出

言部卿藤原三守と公て其義と淳和天皇へ奏聞させゆの事新帝勅許在り右司小勅詔を下りて宝車夜供奉の公卿前隨後従の武士を定め行幸の儀式厳重小整へんと仰出るると上皇固く御辞退かりの事上再三勸結りとも承引むる事遂小前駈兵杖の儀式を差止られ御馬小召れ供奉の官士少々召連りて密小出

峨の離宮遷幸なりひる見ひく儉約を民示す奢殺と絨りむらゝの
 脚吏とを中へ入る絨難有聖君してをかり多斯て其年暮明る天長二
 年の春より夏々け三月の間雨曾て降と緒國とも早魁とて農民們耕種す
 る死水の便を失ひ大困窮おほひれ淳和天皇宸襟を心ひの群臣を
 召して御評議あり此上を行徳勝と僧綱小命雨を祈せよと勅詔在る
 を西寺の守敏僧都早くも洩して急死内して奏す多貧道守敏多年
 身命と抱つて佛道の真義を学び究め就中祈雨の法小熟し此を此度の祈雨と
 拙僧小命とむつるを願ふ是空海和尚勅命の下らぬ前祈雨して雨を
 降して空海師小鼻あせ先年の遺恨を晴さんと心巧まなり執奏の公卿其直と
 奏聞おほひれ帝も御信仰の守敏願ひを承り守敏西寺法の義と命す
 命すとの宣旨と下り守敏大悦び謹んで勅命と奉り一七日と出ると大雨と

降せいと大言帝殿の大庭祈雨の禮を講種々の供物を調丹絨を凝して祈
 リ多小実も其初の日七日の朝より雲四方起りて洛中闇れ夜の雷
 電鳴ひり大降出車軸を流さぬ上帝王より下庶民小く其
 法力を感得て斯て二時より雨降て天霽れ帝有司小命と雨の霽す処を
 檢見せりも不漸く東西兩京の近國まで雨及みれ有司の徒立ちりて
 其由を奏する帝史召斯て八普く耕作を助る小足がごとと再び空海和尚
 祈雨と命すとの宣旨と下り守敏是を傳て心中安うと思ひ西寺小命
 内秘法を修り大小諸の雨龍を二箇の稚子の中驅電秘符を以て封じ籠再び雨
 の不降すも巧くも嫉妬の邪念を恐り空海和尚林茶廷より祈雨と命すとの詔
 命と給り多小命謹んで奉りて高弟真雅實惠真曉真然本と率て神氣
 苑小禮を儲け存戒して身を浄め禮上登りて肝膽を碎れ雨を祈る小何ある也

小や七日満すれども一滴の雨も降ざりされども大小祈りもいまふり天文易術不達し
 袖中卦を立天眼通の法を以て見ゆ小雨の不降も理り守敏諸龍を驅て瓶
 中小封ト筆一由かりしに空海師守敏が悪念と憎と徒弟小告て曰く我丹誠と疑
 一雨を祈まざる雨の不降も守敏法師其身の修法普く雨を降まると更不誠と耻
 せど却て此空海を妬して雨竜を驅て封ト筆雨を降まると巧むたり昔天空の一角
 仙人も龍神を恨み瓶中小封ト筆て世を早魁せりや多る美人の色小眼を奪りて
 酒を盛まると法力破き却て龍神の為小宗を受て死せりと名守敏くる例を知
 ぬが一時の妬心より空海小耻辱と取せん諸龍を封ト筆雨を止むる偏執の念を
 浅猿も抑天子恐るも空海をして雨を祈らせると敢て御戯小あむと天下万民
 の困苦と救せむ人の聖意にて在るとものを私の遺趣を以て上一人より下億兆
 の歎然願ふる更天下の罪人佛法の悪魔なりと天小向く唾を吐天と汚き人と

欲とも天を汚すと更能と却て其身を汚すと小將守敏が習たり其罪已可
 たるものも渠小龍を封むるカあれ我すも雨を呼法カあらずや此神泉苑の池中
 小善女龍王とて阿耨達池の龍王の脚女も守敏人どの行カ小く驅更能す
 始より守敏が巧むる為更をまむる疾小の善女龍王を請詔して雨を乞ふ
 を不知て空しく且重なりと一雨且過さむ膏雨を降して普く万民の歎
 れを怡び小及り得まを奪として朝廷へ三日の日延を願ひの芽を結んで二蛇
 形を造り池辺の檀上小祭りて再び真言秘家の雲法を修し丹誠を抽て祈
 る更一日夜小及びぬれを忽ち池中より其長守むるの金色の小蛇出現し檀
 上の龍の形代長弁の頭の上小赤く真雅實惠以下の高弟の眼小くを奪ひ
 其余尋常の僧すも守護の公卿武士たは是とる更能とて空海神向神
 龍の出現を以て大小歡喜あり倍精神を勵て祈り神蛇の首を伸して

虚空亦向といひく俄小風颯と吹下り密雲山の端より湧起ると一雷の雷
鳴天外小夷たなむ黒雲一天小満一風勢倍強く雷電弥厲くして暴雨
盆を傾るが如く降出り多し檀の周小叩僧俗も雀躍して悦むるハナ
此時西寺小守敏が秘封破きて瓶中の諸竜虚空亦起登りとも小雷雨を
降り多し雨勢小前十倍浴中浴外の貴賤老若我を忘る踊舞恰ひく
声雨の音小雜りて揚りく空海和尚も念願満足せりと檀下りの徒弟と
従へ禁廷へ参り帝大い睿慮在り大僧都に任され若干の采地を給り
るを空海和尚再三辞退りとも勅許され已更を得て拜受あり天恩
を厚く謝りひ依りて東寺へ歸院りひたり去程小甘雨降度三日三夜
小余り々を五畿七道雨のいぬぬ里中く潤る池も水溢と早割る赤土
も潤地とわり々る小万民腹鼓をちて恰ひ勇く空海和尚の法力と受て

空海の活如来と尊み真言宗小依をる者幾億万の數限もなき念空海和尚
乃法義世小盛人小ぞかり多し是ハ相及て西寺の守敏僧都ハ空海和尚小不覺を
取せん諸龍と瓶裡小廻封りたる小善女龍玉の威力小忽ち秘封破きまも
の精巧画餅とかり空海和尚の法徳を知り不知も讚美りれを守敏憤怒り
念心小満腸も劫火のよ小燃るがごとく嗔嘆の焰消がれをよ此ハ空海を
咒咀殺し前憤を散せんものと一時の嗔怒より大惡念を生り寺中小一場の護
檀を構へ上檀小孔雀明王と祭り菓の人形を造りて前小注連を張供物
を調護を焼立念珠揉立水穀を断り一心不乱小祈りるを護の煙を空
中小渦卷上り咒文を唱る声小眞衆を發を許して物凍も恐ろくくくく
海和尚斯も知り召む一朝庭前出り四方の本を見り西寺の方小あつて
怪り煙立上り風小逆て東へ向ひ麻非れり小心訝りひて松房よりくく占

三十一
三十一
三十一



穴三海母



女人禁制と
犯して
空海の
母種を此
怪異より

守敏僧都の御身を咒咀調伏す護天の煙を更頭をこれをも我
も火害滅除の法を修せんと徒弟小僧と祈の檀を毀せ不動明王の尊影
を祭注連幣串種くの供物いりたる法の如調を檀上座を構う護摩
を焼く水晶の珠數千もて不動の真言を唱へ丹誠を凝して祈りひるまれ
む當時天下小名高れ権者と名僧の行力競りて多年修学の功を尽し肝膽
を碎れ祈り合れ程小西寺の護摩の煙は東寺へあびき東寺の黒煙は西寺
へ向ひ双方の煙雲の下に虚空翻満し凡夫の眼も遮りね双方の天部万眷族
東西の雲中小充滿して互射違る飛箭前六兩の脚より敏く昼六日の影を曇り
夜八月の光も朦朧として傳安帝釈修羅の闕ひの斯やと見え凄くうらうら
程小西僧二七日が向息をも吐き祈合多程小更小勝劣ふらむ何時果成りとも見
えざらん空海和尚心中小呪一行を案し出の鱸魚といふ魚を多く取寄き

3
寺内の庭にて焼きたる其臭氣をわたりて死人を焼か如く空海和尚は風
を呼法を修りて忽ち東風吹きて魚嗅を西へ吹送りたる小西寺の守敏
此嗅氣を嗅て偈念法我法法の為落命今火葬ふらるるあんと大詔
慢心生じ精神絶し時珠數を標止息吐と吐く小忽ち呼吸の息断向
絶辟地して其代祈の檀上座斃死し今世を鱸魚を家内
小く焼きたる更と言傳り嗟乎愚ある守敏一朝の妬心より多年練修
せし佛道の本意を忘る空海和尚の如き善知識を咒咀せん却て其身
を亡滅る更所謂咒詛毒藥還著於本人の經文の如し是志りかかす只
諸龍を封じ困り崇める慎むべし嗚呼嗚呼諸も守敏の弟子僧亦
師匠が檀上座を頓滅せしめて大の該た藥よ水よと至強だ左右して介抱し
んれも再び蘇生すともふらんを為方ち屍を収めて守敏は死せ義を朝

延(奏)聞(奏) 遂(つ)茶(茶)比(比)の煙(煙)とど(と)り(り)る(る)是(是)より(より)西(西)寺(寺)漸(漸)く(く)小(小)裏(裏)微(微)東(東)寺(寺)進(進)マ
繁(繁)栄(栄)して(して)末(末)代(代)の(の)今(今)や(や)で(で)堂(堂)塔(塔)巍(巍)々(々)然(然)る(る)空(空)海(海)和(和)尚(尚)の(の)法(法)徳(徳)あ(あ)り(り)所(所)ナ(ナ)リ
其(其)後(後)空(空)海(海)和(和)尚(尚)ハ(ハ)和(和)州(州)室(室)生(生)山(山)火(火)先(先)々(々)東(東)國(國)北(北)國(國)南(南)海(海)四(四)州(州)の(の)津(津)浦(浦)を(を)た(た)て
経(経)歴(歴)して(して)靈(靈)場(場)を(を)開(開)け(け)り(り)人(人)の(の)通(通)り(り)ぬ(ぬ)深(深)山(山)高(高)山(山)の(の)道(道)と(と)通(通)り(り)渉(渉)が(が)た(た)大(大)河(河)が(が)橋(橋)
を(を)掛(掛)水(水)脉(脉)あ(あ)り(り)れ(れ)田(田)畑(畑)水(水)林(林)引(引)専(専)方(方)民(民)の(の)助(助)と(と)力(力)の(の)ひ(ひ)ら(ひ)く(く)史(史)緒(緒)國(國)の(の)人(人)民(民)信(信)皈(皈)
依(依)り(り)空(空)海(海)和(和)尚(尚)の(の)御(御)加(加)持(持)と(と)受(受)る(る)者(者)賢(賢)も(も)起(起)躰(躰)も(も)中(中)元(元)瘡(瘡)も(も)能(能)言(言)盲(盲)も(も)目(目)を(を)
明(明)年(年)日(日)に(に)難(難)病(病)疾(疾)病(病)も(も)治(治)せ(せ)り(り)生(生)靈(靈)と(と)り(り)如(如)此(此)あ(あ)れ(れ)ば(ば)増(増)て(て)況(況)や(や)九(九)泉(泉)の(の)
下(下)小(小)迷(迷)亡(亡)靈(靈)の(の)成(成)佛(佛)得(得)脱(脱)と(と)る(る)更(更)ハ(ハ)推(推)て(て)知(知)り(り)真(真)ふ(ふ)可(可)代(代)の(の)知(知)識(識)あ(あ)り(り)在(在)る(る)
母(母)公(公)阿(阿)刀(刀)氏(氏)望(望)登(登)高(高)野(野)山(山) 山(山)中(中)怪(怪)異(異)慈(慈)尊(尊)院(院)之(之)條(條)
空(空)海(海)和(和)尚(尚)一(一)年(年)高(高)野(野)山(山)小(小)御(御)在(在)住(住)の(の)時(時)御(御)阿(阿)刀(刀)氏(氏)介(介)師(師)小(小)御(御)對(對)面(面)あ(あ)れ(れ)と(と)以(以)
て(て)戀(戀)しく(しく)思(思)召(召)々(々)の(の)御(御)向(向)顔(顔)な(な)る(る)や(や)り(り)又(又)々(々)名(名)小(小)高(高)野(野)山(山)の(の)堂(堂)塔(塔)を(を)も

拜(拜)ん(ん)と(と)男(男)女(女)數(數)人(人)の(の)徒(徒)者(者)を(を)將(將)て(て)續(續)州(州)展(展)風(風)浦(浦)を(を)ま(ま)る(る)紀(紀)伊(伊)國(國)の(の)高(高)
野(野)山(山)の(の)林(林)下(下)小(小)著(著)て(て)先(先)使(使)を(を)空(空)海(海)和(和)尚(尚)の(の)本(本)坊(坊)遣(遣)り(り)登(登)山(山)と(と)な(な)り(り)と(と)通(通)せ(せ)ら(ら)れ
た(た)れ(れ)師(師)亦(亦)該(該)れ(れ)り(り)我(我)母(母)公(公)遠(遠)く(く)此(此)山(山)來(來)ら(ら)せ(せ)り(り)脚(脚)志(志)き(き)い(い)も(も)忝(忝)め(め)れ(れ)る(る)當(當)山(山)
を(を)開(開)発(発)の(の)始(始)り(り)固(固)く(く)女(女)人(人)結(結)城(城)の(の)地(地)と(と)定(定)め(め)れ(れ)母(母)と(と)り(り)て(て)登(登)山(山)あ(あ)り(り)更(更)緒(緒)佛(佛)緒(緒)
神(神)心(心)あ(あ)り(り)暫(暫)時(時)待(待)り(り)中(中)々(々)せ(せ)り(り)我(我)今(今)此(此)の(の)法(法)要(要)示(示)果(果)願(願)て(て)下(下)山(山)と(と)母(母)公(公)小(小)御(御)對(對)
面(面)ナ(ナ)リ(リ)進(進)ま(ま)り(り)と(と)使(使)の(の)武(武)士(士)を(を)送(送)り(り)ぬ(ぬ)る(る)小(小)母(母)公(公)を(を)使(使)者(者)の(の)還(還)る(る)を(を)待(待)り(り)び(び)ぬ(ぬ)る(る)
男(男)女(女)の(の)徒(徒)者(者)と(と)將(將)て(て)早(早)花(花)坂(坂)あ(あ)り(り)羊(羊)腸(腸)を(を)山(山)路(路)を(を)割(割)り(り)登(登)る(る)所(所)小(小)依(依)並(並)と(と)
て(て)一(一)陣(陣)の(の)魔(魔)風(風)吹(吹)起(起)り(り)樹(樹)木(木)と(と)動(動)搖(搖)を(を)砂(砂)石(石)を(を)起(起)し(し)土(土)煙(煙)騰(騰)騰(騰)と(と)す(す)前(前)路(路)を(を)
え(え)ん(ん)ど(ど)成(成)れ(れ)ぬ(ぬ)母(母)公(公)を(を)隨(隨)從(從)の(の)男(男)女(女)中(中)見(見)け(け)り(り)ぬ(ぬ)山(山)風(風)あ(あ)り(り)て(て)側(側)の(の)木(木)は(は)小(小)
立(立)寄(寄)り(り)時(時)休(休)ら(ら)ぬ(ぬ)風(風)倍(倍)烈(烈)しく(しく)刺(刺)し(し)暴(暴)雨(雨)降(降)出(出)雷(雷)電(電)津(津)々(々)鳴(鳴)り(り)て(て)山(山)鳴(鳴)
谷(谷)谷(谷)答(答)震(震)動(動)と(と)る(る)更(更)野(野)の(の)母(母)公(公)六(六)年(年)老(老)あ(あ)り(り)氣(氣)丈(丈)の(の)性(性)や(や)て(て)少(少)く(く)も(も)あ(あ)ら(ら)ず

雷雨を犯して登りし随従の者天変を恐るるを歩みて地小匍匐もあり又轉
逃下るも有る果ては母公に従ふ者なり母公六足歩て三足吹戻る二足歩
て五足跡退りかぎり尚も登らんるものも大雨弥車油を流とがごとく登り兼
の所へ使者の立し武士混沾小感て走り来り此体を見令母公と押止り大僧都
の仰ふ當山と女人禁制をいふを登山かゝる更無と頓て僧都脚下山あり
て却對面なりむ久間禁待せらるる御変なり先刻より雷雨烈く山の荒れ
女性御身かゝ登山しるを山神の咎を言ひていざ早く禁下り御下あり待
りかゝと練々れども母公敢て承引かゝる高山あれ天狗魔縁の類も柶
ぬかり自余の女人を登山名叶も此山我ま開れる佛場なり然も其母と妻
が登山とて妨る魔障もあはれ雷雨時の天変の何と異ととも小足
として武士が笛ひる袖を振切心強も登らんふ又も山上より暴風強く吹嵐し母公

を洞吹落さんとさるる母公落されと側の巖の尖を両手ふりて踏止り
一念力のあも処小や思ふと山石の尖を捨れり今も存て捨岩と稱するは是あり
う天変も母公猶登山せんる念止り却て心中小嗔を生じたは此身微塵
小あるとも登山せり半と悪風雷雨の屈せど衣服六寸小裂破と白髪散り小
お乱れ下折の枝を杖り身命と抛つて登られども不思議やか降る雨
火焔とかり面と向るもかゝるもの母公も惘思あや人雨の為焼殺され
んと志す所空海和尚来りて路の側なる大盤石を片手小く押上り母公と
巖の下へ押入るも母公其後同絶りいひて花塚の名高き押上り是なり空海
和尚母公の絶死を御覽し口中真言の秘文を唱りて頓て風雷雨電
母公息を吹返り四辺を人廻り空海和尚の御身を人上のひの掌と合し伏拜り
三女五障の罪深死身を願す愛着の絆小男を靈場と強て穢んる已

前

()

火の雨も焼殺さんん其後八夢とも現ともかど廣くと暗た道か迷ひか
 いと恐ろし鬼出来り妻と別立行んとせ小端嚴微妙の如来光明を放つて出
 現しゆひを鬼の妻と離し何國とも行く去如来妻小宜ひけるは汝女人の身は
 て結界の靈山(登山)登んせしゆも諸天怒を發し已れ你が命と滅せしとせりされ
 とめ你が子の空海が法徳よりて予你が命と助け再び沙婆婆世界へ歸しゆんぬ
 此後嗔嗔の心を慎み佛道不可思議の理を疑ふ更ぬれ你空海を我子と
 と思ひもえき佛菩薩の應化して世に於て借りの借り必むと我子と
 思ひもて教諭しゆひの妻の手よりて旧の路(導)導りしと拜し夢の覺るごとく
 子撫牛りあふ尊の我子とて感涙を流し地お跪れて禮拜しゆふと師を心
 扶け起しゆひ我此山を始より女人禁制と定めしゆ御登山脚無用とて使
 者お下りて我下山して脚對面かきしんと思ひ少の法整とて果て下山しゆ

小早も御登山ありて漸時おも憂き事とんせしゆや小空海が遲疾の罪
 たり怒りしと謝の心を母も感悔ありて妻一時の我慢し小佛神の脚怒と
 惹出せしと罪深き露脚身の科なりとて互小辞讓あり相伴て下山しゆ
 小隨従の男女林下待り母公の恙かれを賀し隨逐せし罪と謝しゆ小を
 母公も衆人の無妻を恨び主従も連て天野の菴お着りしゆ空海和尚と母
 公と別後の脚物結をありし此年来脚側お在り事もさる不孝の罪も免し
 らんと謝しゆ佛法の功德の廣大ある更とれんと脚教化ありし母公感涙と止
 らぬ身身の罪障消滅のとも尼おありし由を願ひしゆ師も脚も
 ありて即時小戒を授けしゆ母公脚始に限りて遂小髪せしゆひ尼の
 ひたれを呂使の男女も小剃髪の義を願ひしゆ小空海曰く尼公の脚
 小い女人とよまれ男子へ入道無用とて女子許剃髪と許しゆ男子の

後心

来心く差止く續断歸らちのの諸幽静の地をえりて菴室を建御母尼
公を住らめりひる。是より尼公佛道心を傾けひ昼夜二六時中勤行
怠りまを。終小七十八才大往生しひる。空海和尚其六七歳を菴室の
側小菴り脚跡懇小吊ひの菴室を佛堂となりて慈尊院是かを
其砌小不動坂の上小女人堂を建り。儲五十九才の脚年藤原某卿乃志
願小依て万燈會と修せられ。空海和尚深く脚賞美在り燈明の徳ハ
日月の光小嗣無明の闇を照とひひ佛前小一燈を供むる其功德莫
大なり況や万燈供養小於也。現當二世安樂ハ小及む子孫繁昌乃祈禱
何更く是小勝るゆれと仰られ。斯く年月押移り空海和尚六十一才小
かりの年の十月十五日緒の高弟達小告て曰く我豫て二百才を世小住
て教法を守む所存あり。思く子細あれ。明年三月入定。都率天の社

生一五十六億七千万歳の後龍華三會の曉弥勒佛出世の時を待て我又此
娑婆世界へ生を統一切衆生を化度とす。高野山小真慈小附属。東寺を
実惠小預け弘福寺小真雅神護寺小真濟小授。と脚遺言有る。高弟
達大い小孫は是ハ何をも脚更とす。今幾年脚在世。のひ我後小教示せさせ
り。願われも敢て脚承引ち。猶後の更を脚教誠有る。程かく其年也
暮明とて仁明天皇の承和二年乙卯三月廿日寅刻本坊にて結跏趺座しひ
脚弟子達小仰る。我眼を閉る。入定の期。奥の院の室送る。とて大日如
来の秘印を結び終小禪定入る。ひる春秋六十二才。在りける。脚弟子達。曲
繞りて。弥勒菩薩の宝号と唱て居られ。が己小空師脚眼を閉りひ。各
悲哀の涙小三衣を絞らね。ち。偏小釈尊の入滅を悲。緒羅漢小異あり。芝
どの斯く有果る。わ。わ。を泣く。脚輿小乗す。の。せ。定。惠。真。雅。真。如。直。道。

真紹。真然。是を昇る。奥の院へ移りし。七日の御夜忌。嚴重に執行の
 御弟子達。七日毎。奥の院へ参詣あり。拜せし。神色少し。も斐り。わん
 脚髪鬚。漸く小長く伸させ。奇特なり。斯て。空海大僧都入定。
 むの趣。たを朝廷へ奏聞あり。を帝。天皇。も上皇。和り。御悼。大方あり。と恐
 多も。帝。是。が。あ。政事。と。廢。し。ま。す。三。日。及。び。多。日。廿。五。日。勅。使。を。以。て。御。賀
 沙。衣。座。具。如。意。香。炉。水。瓶。湯。湯。器。等。を。贈。り。給。り。上。皇。より。院。使。を。ま。の。の。辰。輪
 の。御。吊。書。并。小。種。の。御。贈。物。有。り。天下。の。人民。空。師。御。入。定。あり。と。傳。せ。貴。と
 たり。賤。と。ち。悼。惜。せ。り。後。年。文。德。天。皇。の。春。二。年。十。月。十。七。日。大。僧。正。の。官。を
 贈。り。の。ひ。又。貞。觀。六。年。二。月。十。六。日。法。印。大。和。尚。の。叙。し。の。醍。醐。天。皇。の。延。喜。二。十
 一。年。十。月。廿。七。日。弘。法。大。師。と。謚。を。賜。り。り。る。緘。本。朝。無。双。の。名。僧。と。て。末。世。の。今。や
 扶。業。皇。統。後。編。卷。之。三。畢
 此。の。追。御。利益。端。的。なる。事。も。け。り。踐。

扶桑皇統記圖會